

新しい北海道大学AO入試の創造

鈴木 誠^{1)*}, 猪上 徳雄²⁾, 玉田 茂喜³⁾, 西嶋 潤一⁴⁾, 野口 伸⁵⁾
橋村 正悟郎⁶⁾, 門馬 甲兒⁷⁾, 池田 文人¹⁾, 加茂 直樹⁸⁾

北海道大学高等教育機能開発総合センター¹⁾, 北海道大学水産科学研究科²⁾,
北海道札幌北高等学校³⁾, 北海道旭川東高等学校⁴⁾, 北海道大学農学研究科⁵⁾,
北海道札幌東高等学校⁶⁾, 北海道函館東高等学校⁷⁾,
北海道大学薬学研究科(入学者選抜企画研究部長)⁸⁾

Creation of New AO-type Entrance Selection System in Hokkaido University

Makoto Suzuki^{1)**}, Norio Inoue²⁾, Shigeki Tamada³⁾, Jyunnichi Nishijima⁴⁾,
Noboru Noguchi⁵⁾, Shougorou Hashimura⁶⁾, Kouji Monma⁷⁾, Fumihito Ikeda¹⁾
and Naoki Kamo⁸⁾

- 1) Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University,
- 2) Graduate School of Fisheries Sciences, Hokkaido University,
- 3) Hokkaido Sapporo Kita High School, 4) Hokkaido Asahikawahigashi High School,
- 5) Graduate School of Agriculture, Hokkaido University,
- 6) Hokkaido Sapporo Higashi High School, 7) Hokkaido Hakodate Higashi High School
- 8) Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Hokkaido University

Abstract Since Japanese universities adopted 'AO-type entrance selection systems,' 14 years have passed. Here AO is an abbreviation for 'Admission Office' and an AO-type entrance selection system means a selection system which relies on several methods (interview, short essay, etc.) other than traditional entrance examinations on main subjects taught in high school. Hokkaido University adopted such a system as an additional entrance path in 2000. Recently the number of applicants to AO-type selection systems began to decrease and their scholastic ability became worse than before. There are some explanations for the situation. One is the gap between the ideas about the AO-type selection systems university people have and those high school people have. Another is the problem of reliability of the methods used to measure the applicants' capacity or scholastic ability of a specified kind which each university places an emphasis on. These problems are complicatedly linked with each other. We, teachers from both of universities and high schools, tried to analyze and give the order to these entangled controversial points, and discussed the development of new AO-type entrance selection systems in seven meetings over two years. We propose six tentative systems we worked out.

(Revised on June 14, 2005)

*) 連絡先 : 060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

**) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0810, JAPAN

1. はじめに

AO入試は、平成2年に慶應大学湘南藤沢キャンパスにおいて、アドミッションポリシーが明確に打ち出された後、総合政策学部と環境情報学部の入学者選抜に際して、初めて導入された形態である。その目的を集約すると、以下になる。

- 1) 大学および学部の理念と教育内容を理解している生徒の獲得
- 2) 一定水準以上の優れた学業成績をおさめている生徒の獲得
- 3) 高いレベルの自己実現を図ろうとする情熱と意欲を持つ生徒の獲得
- 4) さまざまな分野で充実した活動を行ってきたと認められる生徒の獲得
- 5) 旺盛な知的好奇心と探究心・幅広い視野・豊かで柔軟な発想力を持つ生徒の獲得

導入当時、すでに指摘されていた大学生の進路選択ミスマッチングや、学力あるいは学ぶ意欲の低下といった問題を改善し、従来の学習の到達度に基づく学力選抜によらない多様な選抜形態を実施し、さ

まざまな提出物や論文、面接を経て、生徒が具備する資質を多面的に捉える一つ的手段として登場してきたのである。

慶應大学 AO入試の成功は、他大学に大きな影響を与え、採用する大学は拡大の一途をたどっている。その推移を 図 1 に示す。平成 17 年度入試では、私立大学 364 校、旧国立大学 25 校、公立大学 13 校、延べ 402 校と過去最高に達しており、従来の選抜形態に対峙しうる新しい入試形態として、今日認知されている。

しかし、慶應大学の理念通りに AO入試が各大学に拡大してきたわけではない。少子化を背景に、大学経営の一戦略として AO入試が組み込まれる場合がその一例である。そのため、一概に AO入試といってもいわゆる選抜型の入試形態から青田買いと呼ばれる形態まで幅広い入学者選抜が行われている。そのために、高等学校の進路指導においてネガティブに受け止められることも少なくない。

北海道大学では、各部局で高校生に求める資質を明らかにしながら、平成 13 年度から書類選考による一次選考、課題論文と面接による二次選考という選抜形態での AO入試を導入した。しかし、現在志願者の減少、基礎学力の低下といった他大学と同様な問題に直面している。

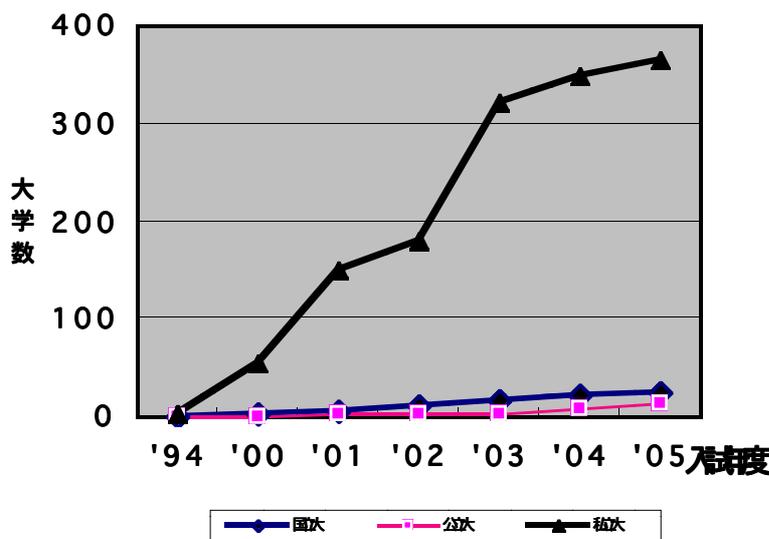


図 1. AO入試実施大学数の推移

本稿では、現在 AO 入試が直面している問題点を整理しながら、これからの AO 入試の方向性について、試案を提示する形で明らかにしようとするものである。

2. 北海道大学 AO 入試の問題点

図 2 は、北海道大学の AO 入試の志願者の推移を示したものである。募集人数は、一部の学科の定員減、また実施学科の参加など、多少の変動はあるものの、導入の 2 年目をピークに総じて減少傾向が続いている。最も志願者数を減らしたのが薬学部であり 6 割近く減少している。また、経済学部の減少も著しい。

そこで、入学者選抜企画研究部では、北大の AO 入

試に関する聞き取り調査を、平成 13 年から 15 年にかけて、延べ 100 校から行っている。そこで得られた様々な指摘をまとめると表 1 のようになる。

北大の志願者数が減少してきた原因の一部が、これらの指摘に現れている。また、これらの指摘は、北大の AO 入試だけではなく多くの AO 入試が直面する問題でもある。

一方、AO 入試を担当する教員側を調査してみると、表 2 のような意見が見られる。

これらの指摘は、大学内において AO 入試が拡大できない、逆に縮小の議論を生み出す一因となっている。

以上の様々な指摘は、広報戦略の見直しだけでなく、AO 入試においてどのような資質を高校生に求めているのかを再度明確にし、選抜形態全体のデザインを再検討する必要があることを示すものである。

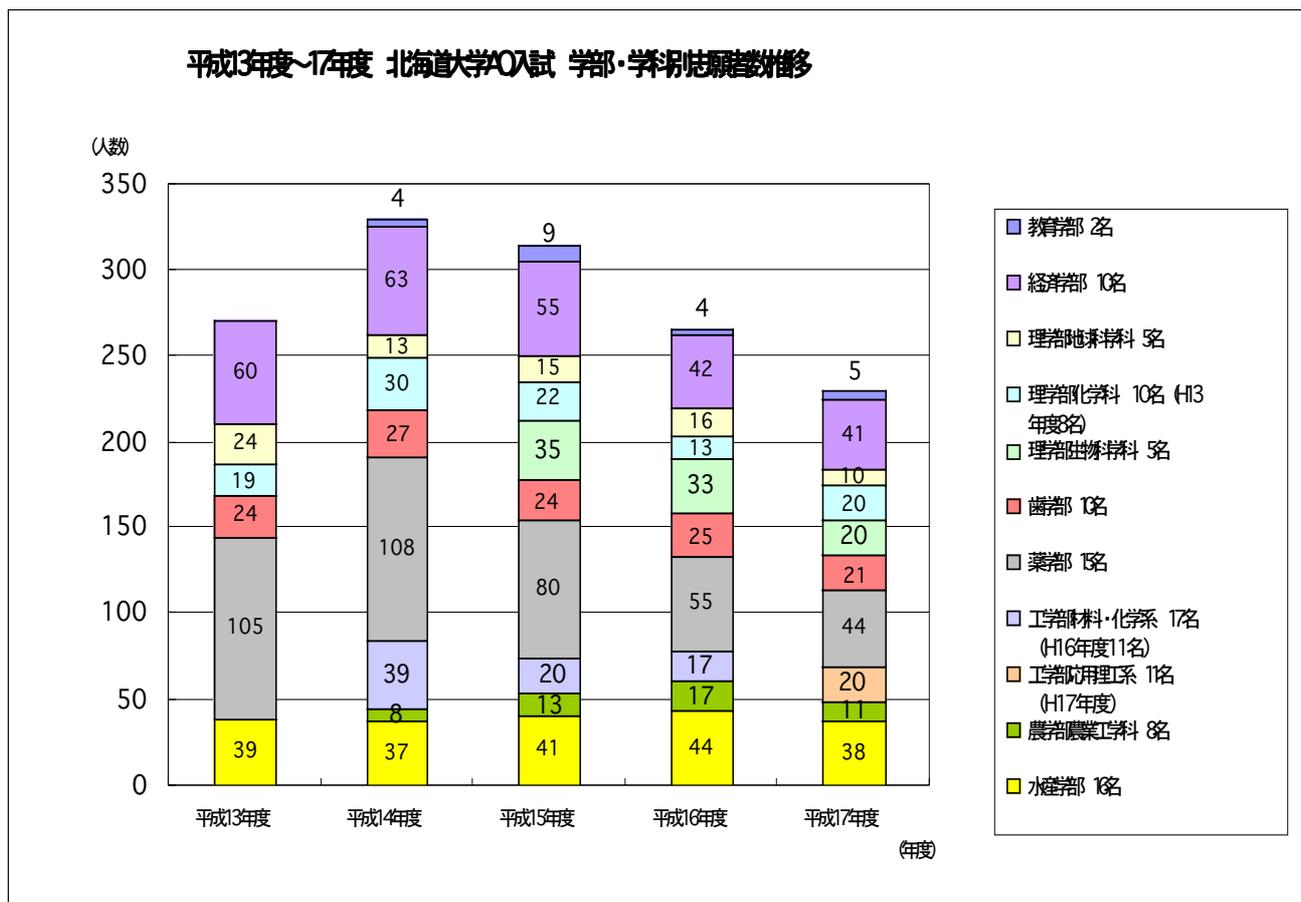


図 2. 入試北海道大学の AO 入試の志願者数の推移

表 1. 高校側の指摘

1. 課題論文や面接といった選抜形態の基準がはっきりせず、不透明感が払拭できない
2. 北大の各学部で求める資質が抽象的である
3. 現在の10月から11月の実施時期では一般入試へのリスクが大きく、不合格者の立て直しが難しい。積極的に進めることはできない
4. 北大 AO の選抜形態が、AO 入試の理念でもある生徒の多面的な能力を見るに至っていない
5. 教師が書く「個人評価書」や「成績に関する提出書類」の負担が大きい
6. ある程度の学力を求められることが経験的に高等学校に知れ渡っている
7. 短時間の面接と課題論文で生徒の能力を見破ることができるのか、その精度に疑問がある

表 2. 大学側の指摘

1. 高等学校は入試戦略の一環として AO 入試を利用しており、求める資質と異なる生徒を送ってきている
2. 一般選抜では合格できない学力の低い生徒を送ってきている
3. 面接や論文で明らかに指導したと思われる痕跡が見受けられる
4. 徐々に、志願者の没個性化見られる
5. 同一高等学校でも学年間に温度差がある。
6. AO 入試の趣旨が高校教員に正確に理解されていない
7. コストに見合った人材が採れていない

表 3. 新しい AO 入試の選抜形態に関する研究会内容

【平成 15 年度】

1. 北大の AO 入試選抜方法の問題点の抽出
2. 他大学の AO 入試の選抜方法の分析、及び提出書類の内容の検討
3. 法科大学院の問題による求める資質の分析
4. 基礎学力の定義についての検討
5. 慶應大学 SFC 教官との合同による「AO 入試の問題点に関する研究会」の実施

【平成 16 年度】

1. アドミッションポリシーに基づいた新しい選抜形態の試案の検討 1
2. アドミッションポリシーに基づいた新しい選抜形態の試案の検討 2
3. 1, 2 を基にした最終報告書の作成
4. AO 入試実施部局との懇談会

3. 新しい AO 入試の選抜形態に関する研究会の発足

これらの問題点を背景に、平成 15 年度に、道内の高等学校の進路指導主事と本学 AO 入試実施学部の教員、及び本学入学者選抜企画研究部の教員とアドミッションセンターの事務員の合同で組織された「新しい AO 入試の選抜形態に関する研究会」が組織され研究が始まった。研究会は、年 3 から 4 回、2 年間で 7 回開かれた。その内容を表 3 に示す。

これらの活動によって、前述した 2 つの指摘を裏打ちするだけでなく、修正できる多くの情報を得ることができた。そこで、我々は、前述した問題点をある程度克服できる、新しい北海道大学の AO 入試の 6 つの試案を作成した。

3.1 試案の大枠

北海道大学は研究者養成を目的とした日本の基幹大学の一つである。したがって、問題解決能力や創造性、学ぶ意欲といった多様な資質だけでなく、北大の教育に十分対応できる基礎学力を具備した生徒の入学が強く求められる。現行での選抜形態での学力保障について不安を感じる大学教員は多い。試案設計は、前述のように合同で研究を進めた後、それを基にしながら各研究員が試案を明らかにする形で進められた。その際、北大が求める基礎学力を定義し、それに対応する選抜形態の設計を合意事項とした。試案の章立ては以下の通りである。

- 1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)
(どのような学生を AO 入試で求めるのか)
- 2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)
- 3) 求める力の定義
(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)
- 4) 実施時期、日程
- 5) 提出書類
- 6) 選抜形態
- 7) 選抜方法に関する具体例 (大胆な例を一つ)
- 8) 事後指導 (入学前教育)
- 9) 大学初年次教育への提言
- 10) 本試案の長所と短所

3.2 試案の分類

試案は、大きく分けると

1. 現状改良型
(現在行われている北海道大学の AO 入試を基本としながら問題点に修正を加えたもの)
2. 新選抜型
(新しい観点から実施形態を考案したもの)

の 2 つに分類される。この分類ごとに章をたてて以下に示す。

4. 新しい AO 入試 I : 現状改良型の 3 試案

現状改良型の試案は、現在行われている北海道大学の AO 入試を基本としながら問題点に修正を加えたものであり、以下の 3 つの試案が得られた。

4.1 【試案 I-1】

事前説明会や英語の読解力試験、フィールド関連課題の実施によるきめ細かな選抜

- 1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)
(どのような学生を AO で求めるのか)

理念:

- (1) 受け入れ大学としては、入学した学生が学部に興味を持っていないのでは困るので、大学に何を目指して入学するのかという明確な意志と、学習意欲に満ちた学生に志望してほしい。
- (2) ただし、大学の共通の授業についていけるだけの基礎学力が備わっていることが条件となる。

考え方:

- (1) 実施学部と受験生のミスマッチが生じないように徹底した説明会を実施する (求める学生像の情報提供)。
- (2) 基本的に学力試験を課さないで基礎学力・伸びる力を高校 - 大学の信頼関係によるデータに基づいて判断する (自己申告)。
- (3) 受験希望者は事前説明会等で十分な情報を得て志望学部を絞り、その上で自分の納得できる学部を決める (マッチング)。

- 2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)

応用を学ぶ理系の学部で募集定員 20 名、志願者は 3 ~ 4 倍を想定したものである。

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

- (1) 学ぶ意欲とその持続性：学生の潜在能力(capacity)を引き出すためにぜひ求めたい事項である。従来
の課題論文試験、面接でこれらの点を評価できる
ことは確認されているが(合格決定前)、入学後
(合格決定後)、周囲の学生に流されることがない
強い意志も望みたい。入学することが目的化して
いないこと。
- (2) 物理、数学、英語などが北海道大学の全学教育で
十分理解できる学力：ある事柄について実際にな
しうる能力(ability)としての必要条件である。
- (3) 応用できる力：勉学を継続していく上での基本的
な事柄(定理など)をきちんと理解していること
及び自らの力で新しい事柄を受け入れる可能性を
秘めていること。

4) 実施時期、日程

- 8月 上旬 体験入学、オープンユニバーシティ
(高校2年生までの間に参加することが望まれる)
北海道大学 AO 入学試験の説明会
- 10月 中旬 ~ 下旬 出願期間
- 11月 上旬 第1次選考
英語試験(TOEFL 類似の読解力試験, 60分)
課題レポート提出(120分)
中旬 第2次選考 面接
- 12月 上旬 合格発表
中旬 入学手続き
下旬 入学前学習(3月上旬まで)

5) 提出書類

高校教員の負担が大きいので個人評価書・調査書
の提出は求めない。しかし、基礎学力を推し計るた
めに学業に関する資料の提出を求める。特に、重要科目
(国語、数学、化学(生物、物理)、英語)は必須であ
る。

6) 選抜形態

- (1) 第1次選考はアドミッションセンター主導で、各
学部の教員も加わって書類選考と基礎学力の確認
を行う。文系、理系、医学系の3系に分けて実施

する。

- (2) 第2次選考は11月第3日曜日、各学部で第1次合
格者に対する面接を実施する。

7) 選抜方法に関する具体例

- (1) 事前情報：高校生が全学教育の授業を参観できる
こと(人数制限は必要)、あるいは実際の物理、数
学、英語の授業を確認できる方法(DVDなどで)
を検討する。
- (2) 第1次書類選考:アドミッションセンター主導で、
各学部の教員も加わって、文系、理系、医学系の
3系に分けて実施する。
- (3) 第1次選考試験：11月第1日曜日に北海道大学
AO 入学試験の第1次選考試験を実施する。
午前に簡単な英語の試験(TOEFL 類似の読解力
試験)及び課題の説明・提示(当日、課題論文あ
るいはフィールド関連 課題を示す)午後には課題
に関連する自分の考えをまとめ、レポートを提出
させる(昼休みをはさんで午後草稿も含めて2時
間)。その後、アドミッションセンター及び各学部
教員による採点、集計を行い、基準を満たすもの
を第1次選考合格候補者とする。
4科目の基礎学力の判定は、高校の2年生の時に
受験した全国模試(校外試験)の素点を提出する。
全国模試を受験していない場合は、3学期の期末
試験の素点と試験問題を添付して提出してもらう。
「学業に関する資料」の提出を求めた学部は、独
自の判定基準を示す。簡単な英語の試験及び課題
レポートの得点を加味して総合的に第1次選考合
格者を決定する(第2次選考で面接可能な範囲内
の人数)。
- (4) 第2次面接試験：11月第3日曜日、各学部で第1
次合格者に対する面接を実施する。最終的な合格
者は第1、2次選考結果を総合的に判断して、各
学部の実施委員会で決定する。

8) 事後指導(入学前教育)

合格通知と共に、入学前学習(3月上旬まで)の連
絡を行い、実施学部に応じた課題等を出す。国語及び
英語の実力を低下させないような課題を与える。(4
回程度やりとりする。)

9) 大学初年次教育への提言

これからは、高校間でかなりの学力の違いや学習

進度に差があると予想されるので、大学ではそれを認めた上で学習進度に応じて授業が受けられるようなシステムを作る。

10) 本試案の長所と短所

長所：

- (1) 高校教員の負担を少なくできる(個人評価書の廃止)。
- (2) 自己推薦書の事前作成に時間がかかる受験生の負担を少なくできる。
- (3) 各学部の教員も加わるが、第1次選考はアドミッションセンター主導で実施できる。
- (4) 受験生に進学することに自信が持てるかどうか実感してもらえる。

短所：

- (1) 高校間による受験生の学力の差が不明確である。
- (2) 事前情報が十分に伝えられるかどうか不安がある。
- (3) 受験生に2度、大学に来てもらうことになる。
- (4) 大学教員の負担を軽減できない(選考過程及び入学前教育において)。

4.2 【試案 1-2】

地方会場での実施を含めたアドミッションセンターを中心とした選抜

1) 基本的な考え方・特徴(本試案の理念)

(どのような学生をAOで求めるのか)

現在一部学部で行われているAO入試を本学のアドミッションポリシーの元で、全学部・全学科が参画する入試制度に拡充することが、北海道大学の特色を社会に認知してもらい、本学にとって「欲しい」学生を受け入れる上で重要と判断する。その場合、学部の入試業務にかかる負担を軽減しつつ、効果を最大化できる制度にする必要がある。このような目標のもと、以下の点に配慮した試案を作成した。

- (1) 学部の入試にかかる投入エネルギーを最小化して、効果を最大化できること。
- (2) 受験生の基礎学力を精度よく計れる方法であること。
- (3) ミスマッチのリスクを抑えながらユニークな人材が発掘できること。
- (4) 入学者の多様性が維持できること(社会人、高等

学校既卒者など)。

2) 想定(この試案の対象はどの部局か)

全学部

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

基礎学力が要求される科目、程度は学部によってまちまちである。また、課題探求能力、課題提起・解決能力などの総合能力も計りたい。このいわゆる「基礎学力」を精度良く計る方法を確立することが、AO入試制度の成否の鍵と思う。いずれにしても、この「基礎学力」は調査書などの高校側の資料によらず、本学自らが主体的に構築した方法が望ましい。

4) 実施時期、日程

10月中旬～11月中旬

5) 提出書類

調査書、自己推薦書、諸活動の記録

6) 選抜形態

第1次選考：基礎学力試験(実施母体AC)

第2次選考：課題論文、面接(調査書、自己推薦書、諸活動の記録)(実施母体各学部)

7) 選抜方法に関する具体例

AC教員と各学部から選出されるAO入試委員で基礎学力試験WGを組織し、AC独自の第1次選考用の試験問題を作成する。この試験は基礎学力を計るにとどまらず、課題探求能力と課題提起・解決能力など総合能力がはかれるユニークな問題も加える。札幌に加え、東京、大阪、名古屋、福岡などの大都市で10月中旬に第1次選考を行う。各学部からは科目配点、最低合格点をアドミッションセンターに提出し、アドミッションセンターが第1次選考合格者を決定する。第2次選考は従来通り各学部が担当する。課題論文に加え、調査書、自己推薦書、諸活動の記録を資料にして面接を実施し、第2次選考合格者を決定する。

8) 事後指導(入学前教育)

入学前教育が入学予定者の基礎学力と勉学意欲の維持を目的としているのであれば、アドミッションセンターの一括指導で十分である。従来通りレポートの提出を義務づけるのも一法であるし、総合能力

などを高める課題を作成して実施するのも良い。

9) 大学初年次教育への提言

AO入試で入学した学生が、一般入試で入学した学生と同じカリキュラムを受講し、同じ卒業認定に必要な履修要件を満たす必要があるかどうかは検討に値する。入学時は一般入試で入学した学生とは異なる視点で選抜しておきながら、入学後のカリキュラムは同じというのは、本来あった「別の評価軸」を否定することにならないか？ AO入試で入学した学生の卒業要件について、全学教育科目と専門教育科目の最低修得単位の比率見直し程度は制度としてあって良いと思う。

10) 本試案の長所と短所

本試案はアドミッションセンターの機能・役割を強化することが本質である。本試案を実現するためにはアドミッションセンターへの財政と人的資源の拡充が不可欠である。入学試験は大学の業務の中でもとりわけ重要なので、アドミッションセンターにAO入試全体のデータ、ノウハウを蓄積させ、効率化を目的とした業務の集中化を計ることが、今後もAO入試を持続的に発展させる上で必要である。

4.3 【試案 1-3】

センター入試の実施を含めた選抜

1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)

(どのような学生をAOで求めるのか)

AO入試の再構築を考えるにあたり、色々な立場や視点があると思う。始まって数年を経たこの選抜を振り返り、本来の理念、規模、形式、選抜の技法、入学後の学生の状況、そして受験生を送り出す高校サイドとしての現状などを総合的に考えた場合、今回は「あるべき理想の立場」よりも、「大学と高校を含めた現実の立場」に立ちってみることにしたい。

研究会における何度かのミーティングを通して、次の幾つかの点に留意しながら考えてみた。

- (1) いわゆる基礎学力について
- (2) 各学部等で求める学生像 (アドミッションポリシー) のエッセンス
- (3) 高校側として、現状の教育活動の成果を正当に評価してもらえ信頼感 (安心感)

- (4) 受験生 (普通一般の高校生) が、挑戦しようという気持ちになりやすい選抜形式
- (5) 大学側に大き過ぎる負担をかけない選抜方法

2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)

文系や理系、具体的な学部学科は想定せず、一般入試とAO入試の関係を捉えた入試システムのモデルという観点で考えた。

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

各学部でそれぞれの「求める学生像」が出されているが、そのエッセンスとしては、概ね「論理的思考力」「発想性、創造性」「学ぶ意欲、好奇心」などに集約されると粗っぽく考えた場合、それらを測定する観点として以下の二つの形に換えてみた。

- (1) 要約力: 本質を掴み取る能力 (ポイントを押さえる力)
- (2) 質問力: 既知の知識・認識を背景に、新たな疑問や課題を見つける力

4) 実施時期、日程

時期について: 高校側からすれば、その後の受験への取り組みを考えると、本格的な受験シーズンとなる秋 (9月末) までには、選考が終了している事が望ましい。

(出願) 夏季休業前 (7月末)

(選考) 8月~9月

(発表) 10月

しかしながら、果たして生徒や高校の指導が7月という早期にAO出願の意志決定ができるか? また、調査書等の書類の対応ができるか?、という点から考えて、結局は現状の日程が妥当ではないか、と考える。

(出願) 10月初旬~中旬

(選考) 10月~11月

(発表) 12月初旬

ただし、センター試験で一定の点数をクリアできる事を最終合格要件とする

5) 提出書類

- (1) 調査書
- (2) 自己推薦書

この2つのみとする

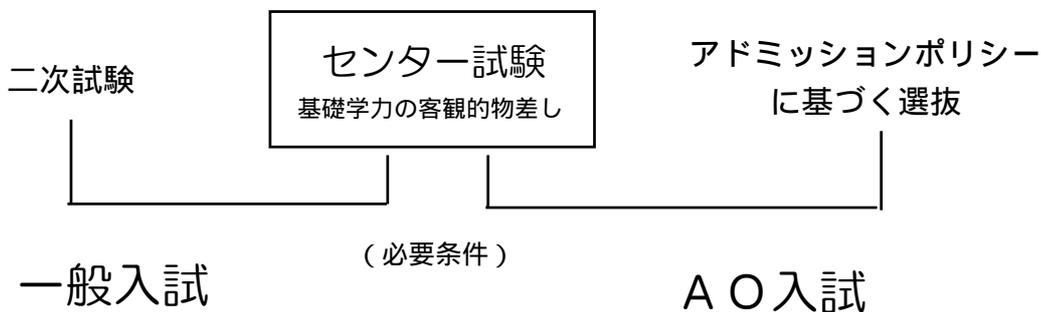


図3. 入試選抜全体のイメージ

(受験しやすさ, 高校側の負担の軽減)

6) 選抜形態

< 一般入試を含めた入試全体の考え方 >

- (1) 双方の選抜形態とも, 基礎学力の客観的判断材料として, センター試験を利用する。
- (2) センター試験は共通項として位置付け, 従来の「二次試験」に当たるの部分と, 早期の「AO 選考の諸要素」とに分け置くことにより, タイプの違う選抜を行う。

不合格生徒のその後の指導について配慮するために, センター試験後早々(一般入試の出願前)に AO 入試の合格発表を行う。

< 入試選抜全体のイメージ >

入試選抜全体のイメージは 図3 の通り。

< 新しい選考方法 >

一定の内容の文章を読ませるか, またはその場で講義を聞かせる, 映像を見せるなどして

- (1) 一定字数の文章に要約させる。(また, さらにそれを発表させて, 発表力もみる)
次への課題へつながるポイントを押さえたらえ方ができているか評価する。
- (2) 質問や疑問, これからの発展的課題を考えさせる。(また, さらにそれを発表させて, 発表力もみる)
受験者の持っている知識や認識を背景に出てく

る質問・疑問から問題意識や課題発見能力を評価する。

* この2つは, 1つの題材に対して同時に設定する事もできるであろう。

< 現状で大事にしたい選考方法 >

- ・ 口頭試問による基礎学力のチェック(現, 薬学部のような)
基礎的知識や理解が本当に身に付いているかどうか, また, 質問に対する理解力や発表力, 表現力なども同時に評価できる。
経験的には, 口頭試問に耐えうる生徒は, 相当高い基礎学力を持っている。

< 選考の流れ >

- 1次選考:
書類選考: 明らかに劣る者をフルイにかけるのみとする。
- 2次選考:
(1) 口頭試問 (基礎学力, 説明能力)
(2) 一定の内容の文章か講義, または映像などを与える。
要約作業 (認識力, 理解力)
質問作成作業 (問題意識, 課題発見能力 & 問題解決能力)
(3) の結果を発表する。または小グループでの討議。

(プレゼンテーション力,
コミュニケーション力,
リーダー性)

<センター試験(最終合格要件)>

いわゆる5教科の到達度を見る意味合いである。問題になるのがハードルの高さの設定であるが、低過ぎると意味がなく、また高過ぎるとこの段階で多くの不合格者が出る可能性もある。ここで多くの不合格者が出ることは、それまでなされた選考への疑義や不信感も生まれやすい。よって、妥当なハードルとしては、

- (1) 各学部の過去の「一般入試合格者のセンター試験の最低点数」を参考にして設定する。
- (2) 各学部の要求の高い科目に絞って一定の点数を設定する。

<センター試験を課す事の意味>

- (1) 基礎学力測定の「客観性」
- (2) 対外的な「透明性」
- (3) 受験生(高校生)の学習活動維持の動機づけ
- (4) 大学側の負担軽減

7) 事後指導(入学前教育)

- (1) 高校側との連携のもとに、できるだけ大学へ出させる。(できれば週1回程度)
- (2) その期間に課題を与えて大学へ出たときに指導する。
 - (1)(2)を3月まで適宜繰り返す。
- (3) 特に必要と考えられる基礎学力(英語、理数系など)を大学レベルへの導入をしておく。
- (4) 可能な範囲で、大学の各種レクリエーションや懇親の場などへの参加を促す。

(1)(2)については、地域差による条件の違いもあるが、あらかじめ選抜要項に記載しておく。また、遠隔地の生徒は「週1回」を「月1回」でも可であろう。また、レポート送付などで替えることも可能であろう。

AO入試の大きな意味合いとして、合格後の時間を利用し、大学と生徒がいかにして密接な関係を持ち、お互いの理解を深めて入学を迎える事ができるか、という点にあると思う。\$はある意味で本筋とは異なるかもしれないが、生徒の意欲と、大学生活への興

味関心や幅広いコミュニケーション性をみることもできよう。

8) 大学初年次教育への提言

- (1) リベラルアーツ的基礎教養科目と、専門的な学問の世界を垣間見れる学習の双方をもって、ある意味新鮮な新入生の興味関心を継続・維持し、さらに喚起できる教育内容(方法)であって欲しい。
- (2) 頭はもとより体も使って、知識よりも多様な学び方(方法論)の体験を数多くさせる。とかく実験実習が少なく、受験学力に偏ってきた高校生には文系、理系を問わず必要な事であると考えらる。

9) 本試案の長所と短所

(私自身の本音とまとめに代えて)

AO入試全体に向けられやすい「不透明である」との批判は、とかく「指導して送り出す立場」の高校側から出やすい。単に批判ならいいが、高校教員と生徒が密接に進路活動をしている現状では、高校側のAO入試への消極さにつながり、潜在力のある高校生の受験の有無につながるだけに、一定の「客観性」や「透明性」、「高校の教育活動の評価への安心感」は確保する必要がある。

ただし、余りにも客観的過ぎ、透明性が在り過ぎる選抜方式が「大学が本当に求める学生の獲得」につながるかは甚だ疑問である。客観性や透明性は、ともすれば、選抜の観点が一定の枠を越えることができないスケールの小ささにつながる。

裏を返せば、大学側は、目的に沿って徹底的に主観に溢れる選抜を行い、受験生はそれに果敢に挑戦してくる姿こそが、本来のAO入試の基本理念かもしれない。本試案提案者自身としては、この案とは裏腹に、主観が全面に出ることによって偏った選抜であると大きな批判を受けながらも、果敢にそれに挑む大学の姿を見たい気がする。しかしながらそれには多大な労力と結果責任を負う気構えがなくてはならない。

5. 新しいAO入試II: 新選抜型の3試案

新選抜型の試案は、新しい観点から実施形態を考案したものであり、以下の3つの試案が得られた。

5.1 【試案 II - 1】

課題レポートを重視した生徒の能力を総合的に捉える選抜

1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)

(どのような学生を AO で求めるのか)

AO 入試では、ペーパーテストでは見いだすことが難しい総合力を備えた学生を選抜したい。総合力と呼ぶのは端的には「研究できる力(学ぶ力)」の意味であり、その内容は3)で述べる通りである。

センター試験を課すことなく合否を決めるところに AO 入試の意義がある。そのため、課題に基づくレポートの提出を求め、その内容から応募者の資質を測って合否を決定する方法を用いる。

2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)

どの部局においても利用できるものと考えて、ここでは具体例を示す必要がある。理学部化学科を想定し、AO 枠20人の募集に対して3倍程度の応募があるという条件で考察する。

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

総合力を「研究できる力(学ぶ力)」としたが、3つの異なる側面が複合して総合力が形成されていると捉える。それぞれの力は更に、下位概念としていくつかの観点に整理できる要素を含む。

(1) 成長する力

対象と接する際の姿勢や人柄など人間的な側面を主に指している。

興味・関心がある

目標がある・自発性がある

協力できる

(2) 考える力

研究対象に迫る知的な側面として4つの力を考えている。

事実を調べる 整理する

方向を決める 方法を考える

(3) 表現する力

対象に興味を持っていると気づくことも自分自身に対する「表現」であろうし、対象に迫る方法を探すための議論も「表現」であると考え。研究の成果を論文としてまとめることも「表現」であることは無論のことである。表現する力はさま

ざまな局面と姿で総合力を文字通り「表現」する。
質問する まとめる 表現する

4) 実施時期, 日程

(1) 募集要項の発表 7月中旬

(2) 応募書類の提出 9月1日

(3) 面接試験 9月下旬

(4) 合格者の決定 9月下旬

(5) 合格発表 10月上旬

課題に基づくレポートの提出を求め、レポートの内容から応募者の資質を測るためには、それなりにまとまったレポートの提出を求めることになる。応募者にレポート作成の時間的な余裕があり、かつ遅くならない時期に合否判定を済ませられる日程として、上のような日程が現実的であろう。

5) 提出書類

(1) 入学願書・検定料など

(2) 調査書

(3) 個人評価書 高校が作成

(資質や将来性, 性格や学習態度を含む生活, 課外活動や奉仕活動などの特記事項)

(4) 自己推薦書 応募者本人が作成

(理科が好きになったきっかけ, 化学への夢, 熱中したこと, 自己アピール)

(5) 課題レポート

(A 4用紙5枚にまとめる(40字40行)。図表等は別枠とする。電子媒体も可)

(1) から (4) までは従来の AO 入試で用いられていた提出書類と同じである。(3) と (4) はもっと簡略化することもできる。資質を測る材料として最も重視されるのは (5) のレポートである。

6) 選抜形態

募集要項の発表に合わせて提出すべき「レポートの課題」も公表し、応募者には夏休みを用いてレポートを作成させる。面接試験では従来の AO 入試で行ってきた面接内容のほかに、レポートに関する質疑応答を行いこちらの方に比重をかける。

「課題レポート」に選抜判定材料として優れた弁別力があることがこの試案の鍵となるが、レポートの作成と選抜については次のような手順となる。

(1) 応募者は募集要項で示された「レポート課題」に基づいて、8月一杯の時間的な余裕の中でレポー

トを作成し、応募書類の一部として提出する。

- (2) 選抜担当者は提出されたレポートを事前に精読し、面接試験(口頭試問)における質疑応答を通して応募者の資質について判定し、その結果を基に合議の上で合否を決める。
- (3) なお、レポート課題を決めるに当たっては高等学校の化学 までの教科書に基づくことは当然として、そのほかにAO入試の性格から次のような事項にも配慮する。

実験などで確かめる要素を含むもの(高校の実験室で)

多様な扱い方・アプローチが可能なもの
他の現象の観察などへの発展がありうるもの
物理や生物の知識も必要とするもの(この方がベター)

課題の例を挙げてみると、

ア エタノール溶媒による無機塩の溶解について

イ 花火の燃焼温度に関する研究(第2報)

ウ The GLOBE is Great! ~石狩川水質調査をとおして~

エ 合成A型ゼオライトを用いた陽イオンの式量の測定

上記の例は、平成16年度の「第43回全道高等学校理科研究発表大会」において化学部門の全28発表中「総合賞」となった4校の発表テーマである。

7) 選抜方法に関する具体例

- (1) レポートの評価と面接試験(口頭試問)に関して事前の準備や評価の観点の統一が必要となる。常識的な観点を述べると、

レポートとして形式など当然踏まえるべきことが踏まえられている

課題の解決方法や仮説などに評価できる個性が現れている

調査が進むと明らかになるはずの未知の部分にまで踏み込んでいる

課題が直接求めているもの以上に課題に取り組むことの意義に気づいている

理科教師の指導・アドバイスを越えた応募者自身の発見などがある

- (2) レポートが示す学力要素と質はふたつの面から評価できる。則ち、各レポートの出来映えの差は総合力の定義に掲げた学力要素の質として現れる。

これは応募者間の相対的な差を示す。また、同じレポートを応募者個人内の学力要素のパラッキとして評価することもできる。ひとつのレポートの中に学力要素の優れている点とそれほどでもない点が明瞭に現れる。

- (3) レポート作成のプロセスの中で応募者本人の多様な学力要素の総合性が発揮される。この学力の総合性は、卒業論文の指導などで経験するとおり、容易に優劣の判別が可能な姿で立ち現れる。もし厳密性を求めるなら、「3) 学力の定義」で掲げた3つの観点、あるいは合わせて10の学力要素で示した下位概念に分解して箇々に優劣を判断すればよい。
- (4) 応募者本人ではない、教師の指導という「応援」の混入が生じる。その際は、応募者本人が取り組んだ部分を評価することになるが、質問してみれば容易に両者の区別ができる。

8) 事後指導(入学前教育)

合格した生徒は、学習意欲が高く、学習方法に関してある程度のレディネスがあるので、入学前教育は効果を上げることができる。AO入試の主旨から見て、全員に同じ課題を与えて提出させることも部分的には必要だが、箇々の合格者に即した課題を与えることがいっそう重要である。例としていくつか挙げてみると、

- (1) 提出したレポートを発展させる追加のテーマを与え(考えさせ)、レポートを提出させる。(長所を伸ばす)
- (2) 口頭試問や調査書などから明らかになる学力的に不安な部分を補う課題を与える。(短所を補う)
- (3) 理科3科目を履修しているものはほとんどいないと思われるので、Bレベルで3科目めの学習を行わせるための課題を与える。
- (4) 科学史などの文献を指定し、北海道大学理学部化学科が学問の先端でどのような位置にあるのかについて学ばせる。

9) 初年次教育への提言

合格後しばらくしてから卒業生から聞く初年次教育についての感想は「つまらない」というのが多い。専門教育を受けるための準備教育という点に比重を置きすぎるために、ともすれば高校で学んだことの繰り返しになることがこのような感想を生むものと

思われる。AO入試の合格者について、選抜するところにだけ個性を求めて、入学後は一般入試合格の学生と同じカリキュラムに合流させるのでは、AO入試の主旨に背くのではないか。合流させれば、彼らなりに個性を發揮して伸びていくと期待するのは誤りではないが、「初年次教育」というブラックボックスに学生を委ねることになって、意図的に育てるという方針の不徹底が生じるのではないか。入試の多様化は入学後の育て方の多様化も含んでいるのだと思う。入学前教育の必要は、単に半年遊ばせておくのもったいないという発想だけで捉えるべきものではないだろう。

10) 本試案の長所と短所

(1) もともと力のある生徒がよいレポートを書くことができる。

時間をかけて作成しているので、レポートの長所短所が応募者の「総合力」を的確に反映している。

これまでの二次試験では蓄えた知識(思考力なども含めて)を用いて、短時間で(長くて120分)答えを出すことを求め、問題も時間内に答えが出せることを前提にして出題しているのだから、知識型の制約から抜けにくい点があったが、「課題レポート」ではこの制約を免れている。

(2) 高校教師の指導という「応援」を無意味化できる。

AO入試の趣旨に反しない範囲での指導(応援)はさまざまな次元で生じるはずだが、一人の教師が応募者につききりで指導する体制は高校の忙しい現状ではとりきれないので、レポートが応募者のものではなく、指導した教師のレポートになってしまうことは、現実的にはないと考えてよい。

また、応募者が消化吸収できた指導は既に応募者本人の学力とみなすことができる。未消化・付け焼刃の学力の部分や応募者本人のものとなっていないレポート内容は口頭試問によって判別できる。本物の学力が否かを見分けるのに紛らわしさが生じない。

(3) 一般入試との掛け持ち予定組みは応募しきれない。

8月末までの40日をレポート作成に当てようとする生徒は、本気である。3年生の夏までに蓄え、育てた興味・関心その他の「総合力」を持たない生徒は、実質的に参加できない。どれだけの時間を費やすかは応募者に任せ、レポート作成の所要

時間は問わない。

一般入試とどちらを選ぶか迷う生徒は一般入試の方に戻る。制度として受験機会が増えることと、一人の受験生が複数の入試形態に実際に挑戦できることは別のことである。

(4) 希望するタイプの者を選ぶことができる。

レポートは応募者の多様な可能性を露呈している。従って、多様な観点から評価が可能である。どの点から見ても粒ぞろいの生徒はむしろ少ない。優先すべき観点において優れた生徒を選ぶことができるが、この選び方は妥当性・信頼性・客観性・効率性とい入試4原則に抵触しない。

(5) 多くの教官の協力が必要である。

レポート課題を決定する場面・レポート作成の問い合わせに応じる場面(この点についての説明は省いている)・レポートを読み、面接時の質問を事前に用意する場面・面接を直接担当する場面・判定会議の場面、多くの場面ごとに協力が欠かせない。完全な分業により一人当たりの所要エネルギーを少なくするとうまくいかないと思われ、60人前後の応募者を捌くのに必要な人数で実施することになるだろう。

(6) 得点で表せる基礎学力との関係。

センター試験でどれだけの得点ができる応募者かといった意味の学力判断が必要なら、調査書を用いて推定できる。しかし、この意味の学力を最重要視しないところにAO入試は立っているのだから、従来型の学力保障を求めると、AO入試そのものが瓦解する。

(7) 高校の教育を変える力がある。

理科の授業の中で「実験」と考察の時間が増えるだろう。大学が求める学力観は直接AO入試に応募しない生徒にも、そのような生徒を指導する教員にもプラスの作用として働かざるを得ない。

また、理系部活動の加入率が上がり、部活動を指導する顧問の指導の仕方も変わると推測できる。3年の夏までに興味・関心をはじめ、ここで取り上げてきた「総合力」を培うことができるのは、部活動が一番有効だからである。

5.2 【試案II-2】

アドミッションセンターが中心となり生徒の資質を育てる選抜

1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)

(どのような学生を AO で求めるのか)

- (1) 今までの AO 入試は、進学校中心に出願が行われ、結局、一般の入試でも合格できるような受験生中心の入試になっている。本来の AO 入試の意味を考えると、一般人試では合格できないが基本的な学力の高い生徒を合格させることができないかを考えた。そうした生徒が残されている可能性があるのは、受験というのが身近な環境ではない各地方の高校で、そうした高校からの AO 合格を考えたのが本試案となる。
- (2) 基本的に北大はじめ魅力的な大学が行なう入試は、高校教育を変える力を持っており、自分の高校から北大合格者が出るということは、生徒の学習意欲を高め、教育環境を一変させる。しかし、教育課程の問題や授業進捗の問題等、入試学力に対応できない高校は、いくらかでも存在しているのが現状で、受験は、大学の要求に対応した一部の高校のみで行われている。高校教育は、大学側が考えるほどの各種受験に対応する幅広さや深さを持っていない。本試案では AO 入試合格を目指す生徒に個人指導が行われることを通じて、携わった教員の教科及び総合的な指導力・地域の教育力が期待される。地域の教育力向上は、主にその地域から受験生を供給される大学にとっても、長期的に見ての利点は多いはずだ。

2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)

- (1) 志望学部がはっきりしている場合もあるだろうが、高校2年生という募集時期を考えると、北大に入りたいが学部は未定という生徒も対象とし、アドミッションセンターが入試を担当する。各地方の受験が身近でない高校という想定では、学部の志望は問わない方が現実的ではないか。
- (2) アドミッションセンターが募集及び1年以上に及ぶ選抜を担当し、高校教育に影響を与えながら受験生の志望や能力を判断し、各学部に入学者を入学させる形式をとる。
- (3) こうした入試では、アドミッションセンターの負担が大きくなるが、教職員の定員増や各学部からの協力を求めることで対応したい。受験生への対応やレポート提出を通して、アドミッションセンターが、高校の現状を正しく把握することにつながり、高大連携の接点となることが可能になる。

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

- (1) 学習指導要領が定められ、各教育段階での目標が明示されている以上、高校の学習を大学に入ってから学習・研究の基本ととらえ、高校での学習をきちんとこなした生徒を基礎力のある生徒と考えたい。
- (2) 次の段階で、アドミッションセンターからの発信により、興味や関心、探求心、発表能力などのハードルを設け、乗り越えた生徒を合格者としてほしい。
- (3) AO 入試では、本来、一般入試では入学してこない生徒を入学させたいが、一般入試では入学できないのは、受験の情報に恵まれず、高い基礎力を持ちながら磨かれる機会の少ない生徒と想定する。そうした生徒にアドミッションセンターがハードルを設けることにより、高校在学中に全学教育をクリアできるような学力を持たせることをねらう。

4) 実施時期、日程

- (1) 一次エントリー(アドミッションセンターが実施) 高校2年生の6月
 北大または北大の特定学部への入学意志を条件とし、高校1年生の時の成績順位が、その高校の学年3位以内である生徒を対象とする。
 成績と志望理由書、8月のオープンキャンパスを利用しての面接等により30名程度を選考し、エントリーする。
- (2) レポート、スクーリングによる選抜 (AO センター) 高校3年生の8月まで
 高校3年の8月までに5回(2年9月, 11月, 3月, 3年5月, 7月の5回)のレポート
 1回に2課題(英語1課題+文理いくつかの課題から選択)
 レポートは、場合によっては大学への呼出しやアドミッションセンターの教職員の高校訪問も含んだ形になる。
 高校2年生の冬休み(1月)に1泊2日のスクーリング
 レポートに対しての口頭試問、文系は小論文試験、理系の場合は実験
 2日日程の中で学部適性についての面談やカウンセリングも行なう。
 高校2年の1月、スクーリングの段階、また3年の

7月の2段階で、今までのレポート内容等も考慮し、資格を失う場合もある

この2段階のしぼりこみで、15名程度を最終候補とする。

- (3) 二次エントリー(アドミッションセンターから学部への推薦の形式) 高校3年生の9月
 - ・最終的な志願学部・学科を決定して出願、今までのレポートの提出状況と内容、スクーリングの結果をもとに9月に各学部で、面接・口頭試問を含め最終試験を行なう。
- (4) 選考結果の発表 高校3年生の10月
 - ・あまり少ないと、制度を利用しようとする意欲につながらないので、全体で10~15名合格させたい。

5) 提出書類

- (1) 一次エントリー
 - ・志望理由書
 - ・1年生の時の成績順位が、在学する高校の学年3以内であることを証明(定期考査の通算順位等)
 - ・北大の要求する基準を満たした高校の教育課程表(文理共通で英・国は3年間の単位数,理系の場合は数,理科2科目の履修)
- (2) レポート,スクーリングによる選抜
- (3) 二次エントリー
 - ・2年生のときの高校の成績,再度の志望理由書
 - ・今までのレポートの提出状況と内容,スクーリングの結果報告書
 (アドミッションセンターから学部へ送付)

6) 選抜形態

- (1) 一次エントリー

成績と志望理由書,面接等により30名程度をエントリーする。
- (2) レポート,スクーリングによる選抜

高校3年の8月までに5回(2年9月,11月,3月,3年5月,7月)のレポート

1回に2課題(英語1課題+文理いくつかの課題から選択)

高校2年生の冬休み(1月)に1泊2日のスクーリング

レポートに対しての口頭試問,文系は小論文試験,理系の場合は実験

2日日程の中で学部適性についての面談やカウン

セリングも行なう。

高校2年の1月,スクーリングの段階,また3年の7月の2段階で、今までのレポート内容等も考慮し、資格を失う場合もある。

この2段階のしぼりこみで、15名程度を最終候補とする。

- (3) 二次エントリー(アドミッションセンターから学部への報告も含む)
 - ・最終的な志願学部・学科を決定して出願、今までのレポートの提出状況と内容,スクーリングの結果をもとに9月に各学部で、面接・口頭試問を含め最終試験を行なう(講義を受けたり実験を行なう試験,英語題材を含めての小論文等)。
- (4) 選考結果の発表 高校3年生の10月

7) 選抜方法に関する具体例

- (1) 面接・口頭試問
- (2) 小論文,レポート提出
- (3) 講義の受講,実験
- 8) 事後指導(入学前教育)
 - (1) 大学の全学教育に対応できる能力の育成(アドミッションセンター)

今までの課題レポート等と同じような内容で,メール等を使って,学習成果の報告を求める。
 - (2) 合格後の高校での学習状況の確認

9) 初年次教育への提言

AOでの合格の場合は,途中での面談等もあり志望のミスマッチは考えにくい,現状で大学の1,2年での志望変更,受験をしないおす例が散見し,転学部も含めての柔軟性は,受験の平等を意識するあまりに失われてきている部分ではないか。

10) 本試案の長所と短所

- 長所:
- (1) AO入試が高校教育の中に入って高大連携が深まる

アドミッションセンター主導で長期の入試を行なっていくことで,大学が高校の現状を理解でき,高校教育に刺激を与える。入試の先頭に立つアドミッションセンターは,レポートのやり取りを通して高校教育の様子がわかる。
 - (2) 地方の受験に関係ないとされる高校からの北大受

験が可能になる

地元の高校への進学者が増える可能性、レポートへの助言等を通して教員が勉強する等、地方校の教育への好影響が考えられる。高校が刺激を受け教育の質が変わってくる。

(3) 基本的な能力が高いのに大学に進学しなかった生徒が発掘できる

レポート等を教員が手伝うことも予想されるが、厳しい課題であればあるほど教員が手伝おうと思えるのは可能性を持った生徒のみではないか。

高校とアドミッションセンターと一緒に、可能性を持つ高校生を発掘し、学部で紹介していくという考え方ではどうか。

(4) メール利用も可能

メールアドレスを持たせることを想定せずにプランを考えたが、AO 担当者とのメール交換でさらにレポート等の内容相談等、密接な結びつきで選抜の精度を高めることが可能になるのではないか。

(5) 各段階で資格を確認することに意義

もともと一般受験生とは少し異なる生徒を対象にしているが、途中でのレポート、スクーリングを通しての資格確認により、その後の進路変更も可能となる。レポート等を通して高校教育に加えた部分での能力は育成されており、最終的に合格できなかった場合でも生徒のその後にプラスになるような入試を考えたい。

短所：

- (1) 費用負担が大きくなるか
- (2) 高校教育や学校体制が長期の入試に対応できるか
- (3) アドミッションセンターの負担の大きさ
- (4) 合格できなかった場合のその後を考えると、アドミッションセンターからの二次エントリーを学部が尊重してほしいが、それができるかどうか

5.3 【試案 II - 3】

求める資質を捉えるために、実験や実習等のパフォーマンス評価を導入した選抜

1) 基本的な考え方・特徴 (本試案の理念)

(どのような学生を AO で求めるのか)

- (1) 研究者指向の学生の確保
- (2) リーダーシップをとることができる学生の確保
- (3) 学部のアドミッションポリシーの方向性に沿った

学生の確保

2) 想定 (この試案の対象はどの部局か)
理系学部入試とする。

3) 求める力の定義

(どのような基礎学力を具体的に求めるのか)

口頭試問によって行う。基礎学力のレベル、内容はそれぞれの学部で異なると考えられるので、それぞれの学部の要求する基礎学力をここで十分測る。(逆に、初年度以降はAO入試で要求する基礎学力は口頭試問で要求されたレベルと言うことになる)

4) 実施時期、日程

基本的な実施時期は現状のAO入試と同じ時期を想定している。

5) 提出書類

自己アピールレポート、調査書、内申点 3.8 以上とする。内申点の 3.8 はどのレベルの学校でもこのレベル以上の成績がなければまず北大入学後の学問研究について行くことが不可能であると考えられ、また出願の時点であまりに門戸を閉ざすことのないレベルと考えた。

6) 選抜形態

(1) 基礎学力は口頭試問で求める。

口頭試問によって行う。従来型の面接ではなく、基礎学力を測る手段としていわゆる面接を位置づける。一部志望動機に対する確認は行うが、基本的には入学後の基礎学力を確認するためとして行う。全学部。

(2) 問題解決能力、独創性、コミュニケーション力を求める。

ここでは北大の持つ広大な知的財産を最大限利用することを考える。例えば総合博物館、図書館、農場などの知的資源である。

・実験レポート

学部の基礎教養レベルの実験を行う。数名の班を編成し課題を与え実験を行い、レポートは個人でまとめる。

求める資質は、問題解決能力、コミュニケーション力である。

実施想定学部は、理学部・物理学科、化学科、地

球科学科(地球惑星物質化学分野),薬学部,農学部・農業工学科と考える。

・フィールドワーク

北大の広大なキャンパス資源を生かし特に生物系等の学部で実際のフィールドを使用し簡単なまとめを作らせる。

求める資質は,問題解決能力,独創性である。実施想定学部は,理学部・生物科学科(生物学分野),水産学部と考える。

・実技的作業とレポート

実際に問題を作る(解く),石膏模型の作製等を通じて学部入学後の適性を判断する。

求める資質は独創性,コミュニケーション力である。

実施想定学部は,理学部・数学科,歯学部と考える。

7) 選抜方法に関する具体例

理学部・生物科学科(生物学分野),水産学部の場合は以下の通りである。

総合博物館においてテーマを1つ設定し,1日かけてレポートを提出する。例えば3階の学術資料展示の化石などの資料から,生物の進化で考察できることを自由にレポート化させる。

今年であればボプラ並木の倒壊とその展示,そこから考えられる学問的なテーマを考察させる。

8) 事後指導(入学前教育)

センター試験の受験義務づけと基礎力を意識した問題を解答させること,また自己アピールレポートの改訂版の提出する。

9) 初年次教育への提言

入学学生の専門に対する意識の高まりを考え,早期にそのモチベーションを活かす講義を準備する。

10) 本試案の長所と短所

長所:

口頭試問,レポート提出により,受験生自らが十分手応えを感じられるかどうか判断できるはずである。言い換えると何が不合格の原因かが受験生自らが把握できる入試になることが可能ではないか。

短所:

グループ化を行った場合,その中での受験生の動きをどう評価するか。実験,フィールドワークなどの入試の作問(題材)が難しいのではないか。

6 おわりに

6つの試案は,現行のAO入試を改善するに当たって,多くの示唆を含むものとなった。調査書や個人評価書を廃止し,オープンユニバーシティで北大の教育情報を十分周知させた上で,TOEFLに近い課題で基礎学力を問う形態や,従来の課題論文より遙かにレポートの作成に重点を置き,生徒の作成の過程からから大学で伸びる上で必要な資質を見抜く形態は,最も現実的で導入可能である。

また,地方会場での一次選考の実施は,減少を続ける北大AO入試を改善する一つの道であろう。センター入試の実施全学部導入も,基礎学力の確保という意味では現実的な選択である。

一方,入学試験は選抜だけでなく教育の機能も合わせ持つ。高等学校2年次からのエントリーを行い,北大が求める資質をじっくり養成し,やがて選抜していく形態は,少子化が進む日本の大学にとって重要な視点である。

2年間の研究によって,これらの試案を作ることができた。これらを精査すれば,全国に先駆けたい新しい北海道大学のAO入試の創造が可能であろう。しかし,いま日本の社会構造は大きな変貌を遂げようとしている。新しい分野の職種も生まれている今日,求められる学力も変化してきている。研究者として求められる資質は当然ながら,社会的文脈に基づく,新しい学力観も視野に入れたAO入試の創造も必要であろう。これらが具体化できるように次の課題に取り組みたいと考えている。

なお,試案にはまとめられなかったが,アドミッション・ポリシーに準拠したスカウト方式の形態も研究会の中では議論された。客観性,透明性が重視される日本の入試であるが,次世代のAO入試としてスカウト方式は検討に値するものであることを,最後に付記する。

参考文献

- 国立大学入学者選抜研究連絡協議会(2004),「AO入試の現在,未来」,『大学入試研究の動向』**21**, 35-54.
- 島田康行(2002),「筑波大学AC入試の基本的考え方と平成13年度入試の結果」,『大学入試研究ジャーナル』**12**, 17-23.
- 鈴木 誠,阿部和厚,山岸みどり,池田文人(2003),「北海道大学におけるAO入試マニュアル」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯教育—』**10**, 49-58.
- 武谷峻一,押川元重,柴田洋三郎(2002),「九州大学「21世紀プログラム」のAO選抜」,『大学入試研究ジャーナル』**12**, 7-12.